

ぐろっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成二十六年三月一日発行（毎月一回一日発行）
第二十卷十一号（通巻第二三九号）

鈴



ぐろっけ

山口誓子先生追悼号

第 239 号

俳句雑誌

GLOCKE

3. 2014

怪魚

品川 鈴子

松露搔くホームシックの寮歌など

あまた在る句を諳じて誓子の忌

陽炎にナスカの怪魚牙ゆらぐ

春嵐パンチパーマの逆毛立つ



氣掛かりごとなべて覆ひし春の雪
学寮の木の階軋む春一番
孕み猫に弁当ふるまふ及び腰
雛出さぬままに出張あられ買ふ
肩書もハンドルも棄て戻り寒
春陰のシーラカンスは太釘歯



玉

鈴

吟

東京

松本アイ

色鳥やそれぞれ老いて変りなし
秋分けて分水嶺行く伯備線
神在の杜に騒めく神会議
髪減りて目探になりぬ冬帽子
りんどうの紫ぼつと開きけり

愛媛

松本恒子

捨小舟かくす枯葦風にふす
柿すだれこは遠祖の落ちし里
鬼の子のすがる一枝に夕汽笛
鳩までは出せぬ手品や忘年会
留守の間を一気に語り牡蠣料理

兵庫

水野範子

柚子風呂に鱗の骨漬けマッサージ
師走の夜籤で決まりし自治会長
子も孫も妣の襦袢の温もりを
不^{あか}開^{かず}の間名も無き面の煤^か払^こひ
無農薬尻太大根美味佳^う肴

兵庫

水野弘

濡れ案山子東ねて仕舞う納屋の中
濡れ案山子畦に並んで居眠りを
教え子の寒の涙や閨の中
鴉一羽何求めや寒の空
主の逝く教え子涙十二月

香川

三橋早苗

時雨あと「塗りたてペンキ」剥がれ落ち
駐車場小春日和の猫だまり
寒夕焼天地替へせん逆立ちし
願ひごと待合室の聖樹にも
年つまり受診の薬嵩張れり

茨城

三輪慶子

昇りきる三重櫓雪の嶺
園丁の鼻息あらし雪囲ひ
寂しさは色には出さず石路の花
我ながら驚くばかり咳響く
シテの出を促してをり虎落笛

埼玉 向江 醇子

初冬や人の話を深く聴く
白き手で剥けゆく蜜柑美味なりし
冬空に砕け散りしは彗星のみか
物捨つることためらひてゐる冬の夜
落葉踏むことの出来ない友がゐる

兵庫 村田とくみ

高き枝に初生り柿はあばたなる
朝の日に紫紺きらりと秋なすび
曼珠沙華ぽつんと残る分校舎
茸狩ブーツの少女おくれがち
喋り止む少年サッカーの喊声

大阪 師岡 洋子

奉書紙に包む新絹祝ぎ日和
白菜の昨夜の切り口膨らめり
上げ舟の底に身を寄せ冬ちちろ
指を刺すまだいとけなき秋薊
一脚の木椅子枯野のバスのり場

東京 安田とし子

暖炉燃ゆそれぞれ違ふものを読み
楯焼べてふり向く貌に片笑窪
標高一〇〇〇踏みて落葉に日の匂ひ
寒林に透けて那須岳霽れわたり
山暮れて指さし数ふ冬の星

大阪 吉田 光子

鷹ヶ峰三山粧ひ揃ひぶみ
留石の置かれし先に濃紅葉
吉野門太夫の被^{かつ}衣の紅葉色
浮かびゐて池面を飾る散紅葉
結界を越えて見上げる紅葉の朱

兵庫 荒木 治代

駄菓子屋は子等の溜り場店小春
不安ふと障子開けても閉ざしても
目貼して老々介護の長丁場
婆と言ふ呼び名に馴れて炬燵守る
もの言はぬことの安らぎ毛糸編む

兵庫 荒木 稔

仕込場のほのかな匂ひ冬ぬくし
駐車場まではみ出す花屋十二月
年の市バイトの指の絆創膏
ゆがませて被る帽子や煤払ひ
棕櫚を剥ぐこと今はなし祖父の村

大阪 居内 眞澄

開戦日法成立とみせず展
シクラメン守りを隣家に頼む媼
彗星と共に逝きたる冬空へ
カナダへと冬夕焼に銀翼染め
公衆電話カード吐き出す歳の暮

大阪 池田 かよ

着せ掛けるさま巴塚菊供ふ
小鼓と名付けしは虚子新走
忘れ去るさまざまいとし古日記
葉牡丹に雨粒ひとつふたつ百
赤札にたぶらかされて年の市

兵庫 池田 久恵

今日の花サフランと知る誕生日
ちやんちゃんこ真綿を入れて現代風
退院に障子張り替え間に合わす
小春日にごきげん犬とハイタツチ
「俳句」と言うシャンソン流れ冬の朝

大阪 石橋 萬里

日向ぼこ貧乏話して噪ぐ
寒からむポートタワーの命綱
暦売り英語落語を聞いてをり
半鐘の梯子横掛け大根干す
敗荷の裏ばかり見せ水に伏す

愛媛 伊藤マサ子

行く秋や秘佛の寺の閻魔像
彗星の青き尾を引く冬銀河
山深く別荘ありて谷紅葉
紅葉のアメリカ楓煉瓦館
御家老の屋敷の空の枯木星

大阪 井上 あき子

冬雲の割れるを待ちて土いじり
思いつきり捨てると決めて煤払い
嬶ぐらしに慣れて華ぐ十二月
目交ぜする小春の庭の猫と我
鉋で割る冬至南瓜の固きこと

愛媛 今井 忍

師を見舞ふ文に添へたる薄紅葉
駄菓子屋に子ども溢れる文化の日
地芝居のおひねり子役の芸達者
柚子湯出て仏間に母のちんまりと
紙飛行機聖樹の星に不時着す

兵庫 岩木 眞澄

薄羽に陽を透かしおり冬の蠅
愛犬と絆深くす日和ぼこ
僧訪ね寺の厨の美しき冷
初氷透かし見る空よく晴れて
僧総出白装束の年用意

兵庫 岩崎可代子

秋深き糺の森を馬車駆くる
名を変へて流れ継ぐ川散紅葉
茅葺きの千木は新たに冬に入る
太古巖紅葉且つ散る幾そたび
予告なき転勤辞令歳の暮

兵庫 岩田登美子

庭荒す馳くるとや京の茶屋
話また地酒に戻り河豚の鍋
枯葉散る芦屋画廊にピカソ見る
常備菜あれこれ買ひて年用意
灯るまで透く電飾の雪だるま

香川 齊部千里

雲間より初冠雪の嶺白し
見張鴨飛べば浮寝の鴨も翔つ
神一礼して神苑の銀杏掃く
木の実独楽四方八方へ彩揺らす
冬蝶の小さき息もて開く翅

大阪 瓜生堂

混浴もよし小春日の足湯かな
借景の山紅に秋惜しむ
竹林の径や時雨と人力車
天を緋に常寂光寺冬もみぢ
出窓にはポインセチアの有ればよし

東京 遠藤とも子

冬晴れや幼な友より詩集来る
銀杏道ことしの黄葉くすみたる
寺内町に初雪の舞ふ一いしんでん身田
宿坊といふも暖房よく効きて
空襲を免れし町冬日暮

香川 大空純子

呼び入れる神職若し七五三
後れ毛に時折の風冬の蝶
窓叩く賑やか好きの冬將軍
呼び塩を点々と振り薩摩いも
蒼天に櫨の実の艶病より

兵庫 大田 實

ミモザ咲く土手半分を黄に染めて
一声は齡とつたネと花の宴
神域はことさら淨し五分ざくら
三叉路の小祠にはじむ街若葉
笑み送りたき老女佇つ赤芽垣

岡山 岡 敏恵

金管の音階練習木の実落つ
落葉径トロンボーンのまた止まり
夕紅葉いつか一葉となる日来ぬ
深窓に吹き込む落葉母はみず
装飾の爪でくるくる林檎むく

埼玉 岡田 章子

公園は冬パンジーに替はりけり
濃き味となりし牡蠣飯喜ばれ
冬うらら荒川土手に牛の群
枯葦の間に水の一休み
水仙の蕾伸び来る日ざしかな

鈴の奏

品川鈴子選

がうがうと此の世をなげく墓 大坂 小菅美代子

雨上る淀川わんどに捕虫網

大岩にシオカラトンボ羽やすめ

桔梗咲く庭に小さな座禅石

病み上がりとりことなりぬ貼る懷炉

人の幸ついつと見ぬ振り一茶の忌

ルミナリエ男女何人恋の夜

手術後のうわ言吾が名夕時雨

髪染めて傘傾ける寒の雨

ほころびしコタツの掛布繕いて

ダウンマート見知らぬ人に助言され

チャイム鳴りコタツに足を取られをり

鳴る釜の日暮る中庭大火鉢

霊山の吹きおろす風札納

賀状書き無音の詫びを片隅に

塗り稚児の頭にほこり年の暮

大観の屏風に見入り仁王立ち

古本屋の主目配り冬帽子

兵庫

太田 健嗣

兵庫

兵庫

兵庫

兵庫

兵庫

兵庫

兵庫

兵庫

兵庫

兵庫

兵庫

兵庫

兵庫

兵庫

兵庫

兵庫

兵庫

板倉眞知子

西躰いと

坊野貴代美

太田 健嗣

電飾がそつと掲げる冬の月

竹箒児等が張り合ふ落葉搔き

洛北の当り年なる実南天

混ぜ垣の満天星紅葉に日差濃く

駅伝の六区北山しぐれかな

公園の掃除済みたる冬至粥

膝かばい家事も手抜き年の暮

うろ覚え妣のレシビの大根漬け

海鼠腸の高値をよそに海鼠食む

ショートケーキ二つで足りる聖夜なり

着ぶくれて習ふパソコン繰り返し

しばれると言葉懐かし電話口

紅葉狩共にせし人逝きにけり

ログハウスへの坂道を櫛落葉

小手玉の弾け現わる眞弓の実

野ぼたんの散りたる其処も華やける

好物に文添え庭の紅葉添え

蜜漬の花梨を舐めて詠歌会

大坂

大坂

大坂

大坂

大坂

大坂

大坂

大坂

大坂

大坂

大坂

大坂

大坂

大坂

大坂

大坂

大坂

大坂

三浦喜久子

先山 実子

三井 尚美

大西ユリ子

秀

鈴

記

巻頭 三句 品川 鈴子 評
四句 十句 金子 清孝 評

*選句は全て 品川鈴子

雨上がる淀川わんどに捕虫網

小菅美代子

髪染めて傘傾けて寒の雨

西躰いと

〈わんど〉とは湾処と書いて入り江のことで、そこには日が始めるともろもろの命が薙めき始める。そして、じっとしておれない子ども達も虫取りの網を担いで集まってくる。ここは車も通らず夢中で遊んでおれる恰好の場所となっている。偶には絶滅したかと思われている珍しい生き物にも出くわせるわくわくする場所。

人の幸ついつと見ぬ振り一茶の忌

板倉眞知子

日頃無沙汰している人に年賀状を書く。印刷あるいはパソコンでプリントした出来合いの賀状の片隅に肉筆で日頃の無沙汰の詫びの言葉を添えて出す。作者の何気ない優しさが窺える句となった。

竹箒児等が張り合ふ落葉掻き

太田 健嗣

俳人小林一茶の忌日は文政十年（一八二七）十一月十九日。家庭的な幸せに恵まれず、子どもにも解りやすい俳句を生涯に多く作ったが、他家の幸せを見ると羨ましくなるので目をそらすのが習慣になっていたのだろうか、いつしか〈ひねくれ一茶〉と呼ばれたりしている。この句のお手柄はついつと見ぬ振りを見つけたこと。

場所が校庭か公園かあるいは街路か問わない、樹木が次々と落ち葉を散らす。その落ち葉を自分が一番多くかき集めるのだと児童達が竹箒を持って競い合う。彼らの無邪気な競争を好ましく見ている。もしかしたら自分の幼少期の記憶を重ねているのかも。いずれにしても児童等の無邪気で元気な様子が目に見えるようだ。